東京新聞　2011年（平成23年）2月16日（水曜日）

©中日

青木繁の下絵発見

「海の幸」など第一級史料60点

愛知の愛好家所蔵

日本絵画史を代表する国の重要文化財「海の幸」などを描きながら、貧困の末に二十八歳で夭逝した画家青木繁の未公開スケッチや和歌、生活ぶりを伝えるメモなど六十点を、愛知県岡崎市の愛好家（六二）が所蔵していたことが分かった。青木の作品の多くを所蔵する石橋美術館（福岡県久留米市）が確認した。今春開催する没後百年を回顧する特別展で一部が公開される。（社会部・蒲敏哉）

約六十点の内訳は、下絵などが六割、和歌やメモなどが四割。いずれもB5版程度のスケッチブックの用紙に鉛筆などで記されていた。創作活動をしていた一九〇二～一〇年と重なるが、「海の幸」を制作した〇四年に残したとみられるのが約三割で最も多いという。

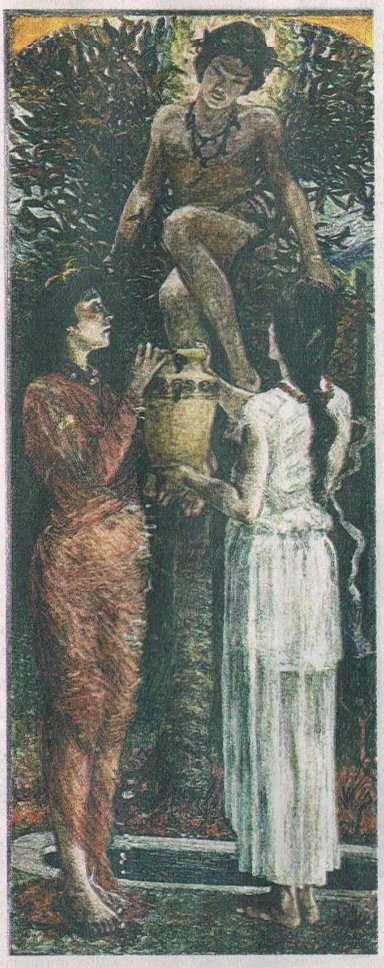
「海の幸」誕生につながったとみられる漁師や魚を連想させるスケッチは約十点あり、制作の場となった千葉県館山市布良で主に描かれた。釣りざおや絵の具を買うための借用書のような書き込み、館山市のある房総半島の地図も確認された。

同じく重文で古事記を題材にした「わだつみのいろこの宮」（〇七年）につながった下絵も二点あった。栃木県芳賀町で描いたとみられるこの下絵の所在が確認されたのは、同美術館によると約四十年ぶりという。

このほか、東京美術学校に通った青木が習作に励んだことをうかがわせる上野動物園のツルを描いた作品も確認。時期は特定されていないが、「京」「大津」などを題材にした直筆の和歌五首もあった。青木は関西での活動の記録がなく、これらの和歌も存在を知られていなかった。青木の動きをたどる貴重な史料となりそうだ。

岡崎市の愛好家は東京の画廊関係者から約二十年前に購入して私蔵してきたが、今年が青木の没後百年にあたることから、同美術館の特別展への協力を申し出たという。

同美術館の森山秀子学芸課長は「青木の作品は油絵、スケッチを含め約四百点しか知られておらず、今回確認した六十点は青木の息づかいを感じさせる第一級の史料。裏表にさまざまなメモもあり、今後精査して作家活動を浮き彫りにしたい」と話している。



左「わだつみのいろこの宮」　右の下絵は構図が異なる＝いずれも石橋美術館提供

青木繁（あおき・しげる）　1882年、福岡県久留米市生まれ。東京美術学校の卒業旅行で漁師やサメを描いた「海の幸」で天才画家と高い評価を得ながらも、画壇の閉鎖性を批判したため孤立。貧困の中、結核により1911年、福岡市で死去した。

特別展は三月二十五日から五月十五日まで同美術館で開催。京都国立近代美術館（京都市＝五月二十七日～七月十日）、ブリヂストン美術館（東京都＝七月十七日～九月四日）でも開催される。

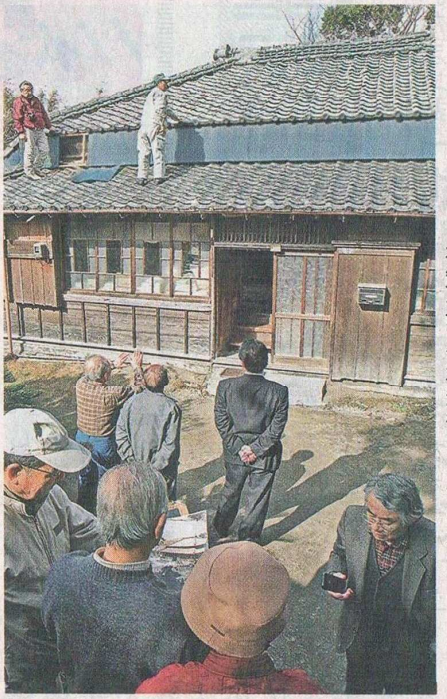
歴史的評価再び

「悲劇の洋画家　青木繁伝」の著作がある渡辺洋神戸大名誉教授の話　青木の作品は油絵、スケッチ含め、その伝説性のため贋作（がんさく）も多い。没後百年を機に多くの貴重な史料が出てきたのは奇跡的で、歴史的評価があらためて検証されるきっかけになるのではないか。

「海の幸」館山の家　存続危機

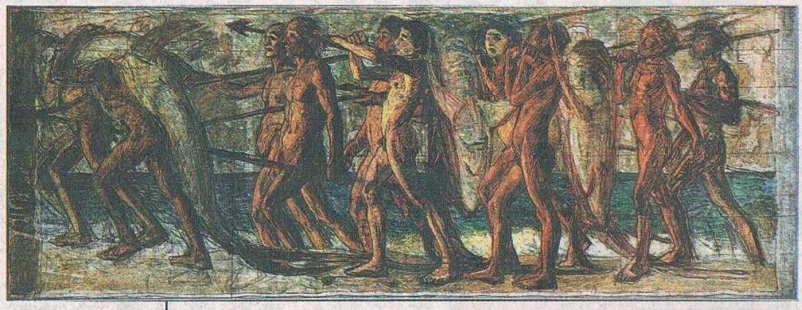
瓦はげ雨漏りも 行政支援薄く…

青木繁　没後100年



青木繁が「海の幸」を描いた家を調査する地元の人々＝千葉県館山市布良で

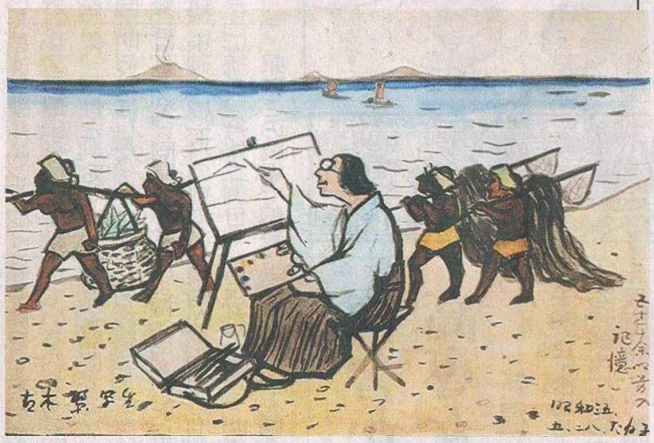
夕暮れに輝く裸の漁師たちの中で振り向く美女の顔。日本洋画史上の最高傑作といわれる青木繁「海の幸」は一九〇四年、千葉県館山市布良の網元宅で制作された。この家はほぼ当時のまま現存するが、存続の危機にある。没後百年の今年、抜本的な保存策を訴える声が高まっている。



青木繁の代表作「海の幸」＝いずれも石橋財団石橋美術館蔵

漁民生活 構想練る

福田たねが描いた、青木繁の布良での写生風景＝いずれも栃木県芳賀町総合情報館蔵



青木繁は一九〇四年七月、東京美術学校を卒業後、恋人の福田たねや友人二人と霊岸島（現中央区新川）から船に乗り、一晩かけて布良にたどり着いた。

地元の網元小谷家に約二カ月滞在し、漁民の生活を取材しながら「海の幸」の構想を練った。絵の中に出てくる白く美しい顔の人物は、たねがモデル。寝泊まりした六畳二間は青木作品の原点とされる。

百年を超えたこの家は傷みが激しく、今月八日、専門家らによる緊急調査が行われた。その結果、天井裏の水漏れのほか、屋根の瓦が大規模にはがれ落ちる可能性があるなど、数多くの問題点が浮上した。

「風雨が吹き込んであちこちがかびている。すぐ手だてを講じないと」。地元で「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」を発足した愛沢伸雄さん（五九）はそう言って天井を指す。

美術界でも故平山郁夫氏らの呼びかけで、NPO法人青木繁「海の幸」会が昨年発足した。事務局長で洋画家の吉岡友次郎氏は「トップクラスの画家には、この絵を見て感動し、画家の道を志した人も多い。布良の家は国民の財産として守るべきだ」と強調する。二十二日に都内で総会を開き対応策を協議する予定だ。

この家を記念館とし、現在住む家族の新居を建てるには、約四千六百万円が必要とされる。現在までの募金額は約三百万円。応急修理に費やせる程度しか集まっていないという。

行政からの支援は薄い。館山市は二〇〇九年、小谷家を有形文化財に指定した。しかし修理のための予算措置は新年度も計上していない。

同市教委は「指定は明治期の漁村の建物として貴重だというのが一義的理由で青木氏が滞在したのは副次的要素。条例は、修理は所有者が行うと定めている」としたうえで「何もしないわけではない。年度内に解説板を設置する予定」と話す。

青木は、「海の幸」で天才画家とたたえられながら窮乏生活を送り、二十八歳で病死した。たねと再び布良を訪ねるなど、この地を終生愛したとされる。

現在、家を守る小谷栄さん（八七）はこう言って海岸の方を見詰めた。「庭も縁側も青木画伯が滞在したときのまま残っている。将来、ここが記念館になったとき、ぜひ一度、海の幸に里帰りしてほしい」

文・蒲敏哉
写真・中西祥子
紙面構成・青木孝行